

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

特集 祝・社会通信三〇年

■巻頭言■

社会通信の三〇年(上)

日本労働者運動史の不可欠な原資料

三十年そして岩井さん

社会主義のルネッサンスを求めて

創刊号からの愛読者

明確な主張と継続の力

夫の首切り

而立ということ

ブログをはじめて一年

いつのまにか座右に・・・

未来ある子どもたちと『社会通信』の三十年

『社会通信』で元氣を取り戻したわが子

読者からのおたより……………14

編集部だより……………10

滝野 忠……………2

塚本 健……………3

菅原 須摩子……………4

原 野人……………5

真鍋 知己……………6

松永 裕方……………6

杉山 智子……………7

上野 義昭……………8

原 義弘……………9

上原 和夫……………11

稲村 ひづる……………12

稲村 守……………13

旬刊 社会通信

NO. 982

二〇〇六年二月一日号

二〇〇六年一月一日発行
(毎月一日・二一日・二二日三回発行)

社会通信の三〇年（上）

全国を行脚していますと、同志から「滝野さん、私は『進路』の時代からの読者で『通信』は初号から大事にしています」と、声をかけられることがたびたびです。最近では、「今年、三〇年ですって。一千号もまじかなようですね。二千号まで頑張れ」と、編集子にはちつとばかり荷の重い宿題を課してくださる読者が少なくありません。

『進路』、『社会通信』の編集にたずさわって約三三年、岩井さんと共に活動した国際労研時代を含めれば三六年にもなるでしょうか。この間、編集一筋でした。我ながら「よくやってこられた」と思う反面、「このことをもっと勉強しておけば」と反省させられることも少なくありません。『通信』三〇年から、今考えていることを率直に記したい。

国会議員への大会代議員権付与 『通信』発刊は一九七七年一月、いわゆる「協会・反協会」論争まっただなかの出發でした。三〇年という歳月を経た今、この論争の階級の本質は明らかです。

日本社会党は「反独占・反自民」の党、資本主義のアンチテーゼとして社会主義をめざす党、平和憲法をもっとも大事にする党としてありましたし、何よりも政権党への批判の受け皿として数万の党員で一千万票余を集票したように、開かれた党、国民の気持ちを率直に受け止める党、民主主義を大事にする政党として存在していたように思います。

この時もちだされたのが、職場・地域で活動する最前線党員の声を党中央に反映する道を封じる「国会議員への全国大会代議員権付与」問題でした。当時、私は三〇歳前後で、「これが大会で決定されれば、社会党らしさが消されていくことになる」との漠然たる不安を抱いておりました。

社会主義協会批判の急先鋒は田英夫氏ら旧社民連と、全電通で左派を切ることで出世街道を爆走中の山岸氏でした。日経連は「国会議員に大会代議員権を付与することは、総評・社会党ブロックの基本政策たる資本主義的合理化反対の路線を弱める巧手」と、まことに率直に論評したことを今も鮮明に覚えています。たとえ烏（からす）が鳴かない日があるうと、社会主義協会批判の記事がない日はないという状況で、テレビ、新聞、雑誌等の大ジャーナリズムによる世論操作は熱病に冒されたごとくでした。今、振り返れば中曽根第二臨調で始まった三公社民営化、とりわけ国鉄攻撃のきっかけをつくった「ヤミ・カラ・ポカ」「国労国賊論」、あるいは政界再編成の端初ともいえる「小沢英雄論」「小選挙区制導入」キャンペーンの原型をつくるものでした。

創刊 当時、私は紋白蝶がキャベツ畑を乱舞する中野区の上鷲宮に住んでいました。向坂先生のお住居とはつい目と鼻の先で、前立腺肥大の手術をされたばかりの先生は、

体力増強のため、散歩に努められました。

社会主義協会攻撃は体力回復に努める先生の気力を超え、総評との「平和協定」になったのです。その中に『協会テーゼ・第二部』廃棄、『進路』廃刊がありました。それからしばらくして、先生は『進路』に代わる情報誌が必要。君（きみ）がやれ」と。こうして思いもかけず、『社会通信』を手がけることになったのです。

事務所は現在、新宿駅から京王新線で二つ目の幡ヶ谷駅が最寄り駅ですが、スタートは飯田橋でした。この頃、毎日が戦争でした。家に帰るのは毎日、午前様。こんな中で、「創刊号」が刷り上がり産声を上げたのです。ちなみに、「創刊の辞」は向坂先生の筆によるものです。

向坂先生 『通信』発刊後ほどなくして、全電通の同志から全電通の指示文書の写しが届けられました。労働戦線はスト権ストの余韻の中、全電通本部の「左派切り」がつづいていたのです。その内容は、『進路』に代わり『社会通信』が出されている。ケシカラン」というものでした。社会党が解党した今だからいえるのかもしれないませんが、全電通や総評指導部のありようと全体状況から、私はその時すでに社会党を離党していたのです。向坂先生に全電通の文書を伝えた時、ただ一言「愉快だね」と、眼は笑われておりました。この時、私は科学的社会主義の理論と実践の意義を教えられたのです。議会制民主主義の時代にあっても「非合法」のたたかい方があるということです。戦術はじつに多様で変える能力を身につけなければならないということでした。先生は大状況はむろんのこと、一見瑣末（さまつ）なことにも、じつにこまやかに気を配られていました。情報収集と連絡は食欲かつ厳格でした。

私などにも時間を問わず連日のように呼び出しの電話がかかるのです。質問事項は広範で、どこから弾（たま）がとんでくるかわかりません。不勉強な私も、多少勉強せざるをえなくなり、先生の質問に備えるため、私流のメモをつくり始めたのも『通信』発刊が契機となりました。先生からの質問にも労働戦線についてのことがしたいにふえていったように思われます。

（滝野 忠・つづく）

日本労働者運動史の不可欠な原資料

社会通信は、来年創刊三〇周年を迎えます。気がついたら、いつのまにか三〇年たっていたという感じですよ。この小冊子に二十歳代末からの貴重な青春と人生をかけた滝野さん、ほんとうにありがとうございます。

社会通信の第一の特徴は、論調と編集内容がこの三〇年間、一貫して変わらないことです。社会主義、労働者運動関係の新聞雑誌は、週刊平民新聞、「へちまの花」以来、せいぜい三〜四年で発禁ないし終刊となるか、長く続いたときには編集長交代で論調、編集内容、主な執筆者が変わっています。商業出版の朝日ジャーナル、文芸春秋、中央公論、アエラ、そして戦中戦後の朝日新聞については言うまでもありません。

社会通信の第二の特徴は、あくまでも、労働者からの直接取材、あるいは労働者の報告文の編集だということです。このごろ、政治学の大学院生のあいだでは、「日本社会党の路線転換過程」が流行の研究テーマだそうですが、その一例の本を読んだところ、既存の文書、大会討議の記録、党幹部クラスの発言記録などをかき集めて、それらを種に文章を書き、綱領の変遷、議席数の増減を論じたものでした。また、そこには党と労働組合の関連の分析はありませんでした。

私は、これでは、労働者運動の歴史を正しく書くことができないと思います。

社会通信は、三〇年間その時々下部の労働者の声、意識、運動を記録しています。そこに書かれた記事は、評論家、ジャーナリストの文章、大学教授の政治学論文ほど洗練されていないかも知れませんが、事実を書いている文章です。労働者運動史の原資料であり、二次資料や、それをまた二次加工した論文ではありません。

「やがてくる日に、歴史が正しく書かれる やがてくる日に」社会通信は第一級の一次資料として、その価値が認められるでしょう。
(塚本 健)

三十年そして岩井さん

三十年、長くもあり、短くも思えるが、大変な三十年でしたね。振り返り、すぐ浮かんでくるのはやっぱり岩井さんの顔ですね。

社長が岩井さんの事務所にいらった時代―三十数年前のことにもなりますかね。岩井さんの家に行こうよと誘いをうけて伊豆多賀―熱海から伊東線で二つ目の駅へ。時は晩秋、黄色く色づいたみかんの木の下で餅つきが始まりました。

岩井さんは丸首シャツで、腰に手ぬぐいをぶら下げ、長靴姿。武井さんらのお隣の皆さんも楽しく参加。餅つきってたいへん、社長はすぐにヘナヘナ。岩井さんが杵をふりつづけましたね。

その間の岩井さんの言葉がすごいんです。岩井さんの連れ合いのお名前はいよさん。臆面もなく、「いよ、いよ」、二言目には「いよ、いよ」。いよさんがいなくては何にもできない様子。「おれになんてもつたいない」とおっしゃるのです。

岩井さんは私にとって、「雲の上」の人だったので、この姿をみて、岩井さんを身近に感じるようになりました。それから岩井さんも私の顔をみるとあいさつはヨッオ〜でした。

社長は国労資本論研究会の向坂先生、それを全面的に支えられた岩井さんとともにありましたし、私などからみれば本当に幸せ。私の友人たちはみんなそう思っているしやると思います。

それにしても、よく三十年頑張ったね。三十年と一口にはいえない、いろいろでしたからね。ともあれ、お疲れさまです。

いま地域のボランティア活動の資料づくりを迫られているところ。みなさんの原稿に期待しています。

(菅原 須磨子・旭川市)

社会主義のルネッサンスを求めて

滝野さんの誰にも真似のできない貴重な活躍と、三〇年の長さで重さを噛み締めています。ひるがえって自分のしてきたことの小ささを痛感しつつ、残されたわずかな時間としたいことの多さに打ちのめされています。

社会主義の灯がすっかり消えてしまったかに見える近年、そのルネッサンスに何が必要なか、二つの病をえた今の体力で少しでも役に立つことはないのか、を追い求めてきました。その主なものといえば、『科学的社会主義』二〇〇四年六月号に『二一世紀の社会主義』、同誌〇五年二月号に『二一世紀の社会主義・2―この理論を生かそう』、同誌〇六年六月号に『二一世紀の社会主義・3―不可欠な三原則と複数政党』と題して書いた三論文です。同誌〇六年五月号の『随想 二〇世紀の教訓から』や同一〇月号の『Mさんへの手紙』はそれを補うものです。

遅れた資本主義国（世界の帝国主義の弱環）から出発したとはいえ、地球の三分の一を占めるほどになっていた「社会主義体制」の中心がなぜ崩壊するに到ったのか、その根本原因を明らかにして、二一世紀に生かさなくてはと思うのです。崩壊の直接の契機や原因はあれこれと挙げられ、論じられている通りでしょう。しかし最も根本的な原因の究明が今まで不十分だったように思います。この混迷は、マルクス・エンゲルスとレーニンの原点に立ちかえってみることを求めています。

鍵は、マルクスの『フランスの内乱』、『ゴータ綱領批判』や、エンゲルスの『反デューリング論』、『家族、私有財産と国家の起原』、『共産主義の原則』や、レーニンの『国家と革命』と革命時から亡くなるまでの諸論述などの中にあります。

生産手段の共有者となって失業から解放された個人々々が、一つの生産手段に奴隷の如く縛られることから解放され、人間的な素質を自由に全面的に発達させるためにも、そしてまた一切の階級をなくするためにも、「旧来の分業の廃棄」がいかに重要であるかを改めて思い知らされました。従来の「社会主義」においては、この理論があまりにも軽視されてきたのです。

ロシア革命に引き続いて成功するかに見えた先進国ドイツ等の革命が挫折したことによって、社会主義の実現は非常に困難な、時間を要する課題となりました。国家を死滅に向かわせるのにも、長い年月を要することになったのです。国家の存続が長くなければなるほど、いかに社会主義の建設を掲げているとはいえ、エンゲルスの言葉を借りれば「国家と国家机关と」が「社会の召使いから社会の主人へ」変質してしまう危険が大きくなります。労働者や農民を支配する新たな階級の発生さえ起りうるのです。この変質を防ぐには、マルクスとエンゲルスがパリ・コミューンから汲み取った「二つのまちがない手段」が不可欠なのです。さらにレーニンはもう一つの必要な手段を加えて、『国家と革命』で次のように整理しています。

「彼らが官僚に転化するのをふせぐために、マルクスとエンゲルスのくわしく考究

した方策が即時にとられるであろう。すなわち、(1)選挙制だけでなく、随時の解任制、(2)労働者なみの賃金をこえない俸給、(3)すべての人が統制と監督の職務を遂行し、すべての人がある期間『官僚』になり、したがって、だれも『官僚』になれない状態へただちに移行すること。」

この(3)は、七〇日しか生きることのできなかつたパリ・コミューンが直接に示し得たことではありませんが、「旧来の分業の廃棄」をはじめとするマルクス・エンゲルスの諸理論から当然に帰結することです。レーニンは最期まで、この労働者階級国家、社会主義国家の三原則を重視して官僚主義の廃絶を追求したのですが、後継者たちはこの原則を軽視し、あるいは無視してしまつたのです。三原則の追求を放棄することによって、プロレタリアートの独裁は、プロレタリアートを支配する新しい特権的階級の独裁に変質していったのです。

今日のアジアにも、「社会主義」を掲げながら、腐敗と変質に陥っている国が見られます。そこに社会主義を蘇生させるためには、各国の最良分子の自覚による三原則等の追求が不可欠ですが、新自由主義によって矛盾が極限にまで発展した資本主義の、日本や韓国やヨーロッパ諸国等における社会主義革命こそが今世紀の最重要課題になっているのです。

(原 野人・東京都多摩市)

創刊号からの愛読者

社会通信が三十周年を迎える。まことにおめでとうございます。創刊号からの愛読者の一人として、滝野忠・嘉津子夫妻の御努力に対して、心の底から感謝し、お礼を申し上げます。

社会通信は科学的社会主義思想に基づいて、階級意識を根底にすえた文献です。日刊紙・週刊紙誌や月刊誌と異なつた時系列で、我々読者に必要な情報・智識を届けてくれました。時間と競争の様な毎日を送っている小生にとって、手軽でこま切れの数分間を活用出来る社会通信は、何よりも有り難い存在です。

日本も世界も大きく変わつて行きます。人間も老います。社会通信の後継者は育っていますか。拡大再生産を期待しています。

貴通信の発展と、皆様方の御健康を、お祈り申し上げます。

(真鍋 知己・新社会党愛媛県本部委員長)

明確な主張と継続の力

「社会通信」が、十一月一日で三〇歳の誕生日を迎えるという。一人だけでよく旬刊誌を継続できるものだとして、予てより私は滝野氏の才能に感服してきた。企画・編集の能力を必要とするだけでなく、世間でいう資本金や運転資金もほとんどない中で継続で、経営力も大いに必要とする状況にあつたからである。半ばふざけ心で滝野

社長と呼ぶことが多かったが、そこには多分に尊敬の念が含まれていた。だがもちろん、一人だけの力というのは正確ではない。滝野夫妻と事務局と言うべきだろうし、多くの人の協力があつたのはいうまでもない。

三〇年前といえ、ずいぶん昔のことになる。「社会通信」誕生のいきさつを知る読者もそう多くはないだろうが、本誌が創刊される頃、どういう名前にするか、廃刊になった「旬刊進路」の読者をどう継続させるかなど、皆で真剣に考え取り組んだことを、つい最近のことのように思い出す。理論研究集団が情報誌を持つのはおかしいという理由で、「協会規制」の一つとして「旬刊進路」が廃刊のやむなきに至った。

しかし、情勢や運動の課題、それらに関する主張を止めるわけにはいかない。だから、社会通信社は、社会主義協会とは何の関係もない、独立の通信社として、しかも直ちに設立される必要があつたのである。こうして「社会通信」は、言うべきことを世に衣着せず述べることを、その任務として生まれた。協会専従はもとより党籍も離れて、滝野社長が誕生した。

「社会通信」継続の力は、何といつてもその明確な主張にある。創刊号は、「協会規制」後の、社会党改革の第一弾である「国会議員等への代議員権付与」問題への批判から始まった。続いたのは、党の路線転換の第一歩である「中期経済政策」批判であつた。他に見られないほどに歯切れ良く、明快な主張が始まり、それは、その後の情勢の分析と批判の記事に受け継がれ、「社会通信」の伝統となつた。

九〇年代後半の社会党解体の後、具体的問題では意見を異にすることもあつたが、明快な主張の伝統が変わることはないだろう。安倍政権が誕生し、改憲の危機がいつそうすすむ中で、情報を伝達し、労働者の決起を促す取り組みの強化が緊急の課題となつている。情報誌の役割はますます大きくなつているのである。

(松永裕方・神奈川県秦野市)

夫の首切り

私が初めて「社会通信」を目にしたのは、二五年ほど前にさかのぼります。

一九八二年三月に当時国鉄職員であつた夫と結婚して、早いものでもうすぐ四半世紀を迎えます。夫が度々職場から持ち帰る「社会通信」なる冊子。何か小難しいことばかり書いてあつて、何度か目を通したものの、その後しばらくは、夫が持ち帰つた「社会通信」は、そのまま本棚行きが続いていました。

八三年に長男が生まれ、ささやかながら幸せな日々を送りつつ、三年が過ぎようとしていたころ、国鉄分割民営化の足音がひたひたと忍び寄ってきました。二人目の子を身ごもっていた私は、分割民営化でどうなるのか多少の不安はありながらも、まさか夫が首を切られるなんて思つてもいませんでした。

八六年夏、衆議院選挙で大勝した自民党(確か三〇四議席とつたと思うのですが)が国民の声を無視して、国鉄国会で「分割民営化法案」をゴリ押ししてしまいました。

私が「社会通信」を気に掛け始めたのはその頃からでしょうか、「国鉄」という文字が目に残るようになりました。

次男が誕生して半年後の八七年二月一六日、「JR不採用通告」の日。「国労組合員は新会社に採用にならない」と巷でささやかれ、私も覚悟はしていました。でも、夫から「助役は、理由も答えずに、『設立委員会の決定です』とだけしか言わなかった。」と聞かされ、悔しくて怒りと涙がわいてきたことを忘れられません。私の・・・私たち国労闘争団家族の怒りの原点の日です。

北海道地労委命令く中労委和解案く命令くくく東京地裁判決く高裁・最高裁判決・・・・「四党合意」・・・そして「鉄建公団訴訟」・・・あれから二〇年の歳月を費やしてしまいました。

今、長男は二三歳、次男は二〇歳と成人し、二人とも高校卒業と同時に社会へ巣立ちました。長男は、昨年五月二八日、結婚式を挙げました。「五月二八日をいい日にするから（悪夢の東京地裁判決の日〇九八年）」と言ってくれた長男。

進学もあきらめさせ、辛い思いをさせてきた子どもたちが、親を気遣えるまでに成長してくれました。

今年こそ・・・今年こそ・・・と、一日も早い解決を求めて闘い続けてきた二〇年。挫けそうに、へこたれそうに、何度も何度もその繰り返し返しの二〇年。その度に、その節々に、「闘争団がんばれ」「負けるな」と応援してくれた全国の皆さん。北の果て音威子府まで駆けつけてくれたのは、一〇〇〇人を悠に超えています。そして、国鉄闘争のそばに必ずいてくれた「社会通信」。

国鉄闘争は今、年内解決を目指して奮闘中です。何かに付けて我慢をさせてきた子どもたちのためにも、「お父さんの仕事を返して！」を永遠のテーマには出来ません。来年三月には杏南（孫）を眼に入れながら明るい結婚式を迎えたいと思います。

全国で支えていただいている皆さん。そして、滝野さんご夫妻に感謝をこめて。

（杉山 智子・国労音威子府闘争団家族）

而立といふこと

「社会通信」三十周年おめでとうございます。この三十年は、現代史そして自分史の上でも、大きな変動の時期と重なりますだけに、ひとしを感慨を覚えます。

資本主義の高度経済成長の終焉と新自由主義的な思想の跋扈（ばつこ）、五五年体制の崩壊。中央に指導部が確固としてあり、末端はそれを信頼してコツコツ日常活動を積み重ねていけば、やがて結果が得られる、と信じてきた時代も過去のものとなりました。私自身にとっても既成の権威と指導部幻想が払拭され、自分の頭で考え、自分の力で前進する、そのための同志を自分で広げていくことを迫られました。

「通信」の刊行の傍らで、私自身も小さき自立の歩みを始めていたのです。その道程で、「通信」に力を借り、励まされ、いつしか私自身も情報を発信するようになりま

した。

思えば「通信」は、私にとって最も幅広く、場を与えていただきました。ジャンルは政治・経済・社会・文化の全般にわたり、論文調からエッセイ、コラムにいたる多様な形式を、実名・筆名・イニシャル・無署名を使い分けて、発表させていただいたことに、あらためて感謝いたします。七〇年代には、どうせ没落していくのだからと興味を失っていた、アメリカ経済の復活の気配に直面し、あらためて現代資本主義に目を向けた過程で、「通信」誌上で折にふれて筆をとらせていただきましたが、私にとって不可欠の作業でもあったのです。また、酒屋や本屋、さらにはスポーツなど日常に密接しつつ、規制緩和や市場原理、世界の見方や組織論まで論じることができたのも「通信」のおかげです。もともと、滝野社主や仲間のみなさんと北海道を訪ねた折りに約束の飛行機に乗り遅れたことまで全国に伝わってしまったこともありましたが・・・

他の場では、裱（かみしも）を着なければならぬことも、字数の制限もあります。それらの制約が一切ない「通信」は、たいへん貴重なものです。それが可能であったのは「通信」の、それこそ恐れない・ひるまない・とらわれない自由な編集姿勢のおかげであり、すべては当然滝野社主に負うものです。

この三十年、大いなる先達や直接間接に支えていただいた諸先輩を失い、痛手を負いました。一方、新たな出会いと交わりを持つことができました。「三十にして立つ（而立）」ということもあります。時代はますます「通信」の出番を求めています。「通信」のいっそうの発展を祈念してやみません。（上野 義昭・東京都大田区）

ブログをはじめて一年

『旬刊 社会通信』の三〇年と比較すれば程遠いですが、二〇〇五年九月、思うところがあってブログを立ち上げ、一年が経過しました。

その思うところは九・一一です。権力とマスメディアのデマ宣伝に、やすやすと民衆が乗せられ、デマゴグに支持を与えたことです。

勉強会や研究会の議論を踏まえ、このデマゴグ政治批判を、学習会で報告したり、ピラやパンフレットにして配布したり、メーリングリストに掲載したりして、発信してきました。それに加えて、ブログでも発信することにしたのです。

それは、凄まじい反動と酷い政治に抗するには、微力でもさまざまな方法で、発信を続ける以外にすべはないと思ったからです。「医療制度改革批判と社会保障と憲法」という、内容も文章も難しい硬いブログを、立ち上げました。

現在なお、ブログの取り扱いの要領がよく飲み込めていません。表だとかグラフをうまく処理することができません。ブログに記事を書くといっても、硬い文章のペーパーを貼り付けるだけですが、娘のお古のノートPCを駆使して、月に二〜三本はエ

ントリーで来たと思います。

この「ブログをはじめて一年です」の記事で、記録を見ると五四本目になるようです。とすれば、週に一本の割合でエントリーできていたことになります。この調子で、二年目もボチボチがんばりたいと思っております。

最近のブログへの来訪者は、一日七〇人ほどで、週で五〇〇人ほどです。七、八月は、医療制度改革関連法が話題になっていたことから、一日一〇〇人以上の来訪者があり、週では一〇〇〇人を超えていましたが、現在は少し落ちているようです。一度だけですが、アクセスランキングに順位が表示された日がありました。それは六月一五日で、六月一四日の法案成立の影響で、六〇万ブログのなかで三桁の順位が表示されていました。各アクセスランキングなどには参加していませんが、グーブログは一〇〇〇位以内のときは表示されるようです。

ブログを立ち上げ一年で、来訪者は延べで一〇〇〇〇人を超え、二〇〇〇〇人近くになっていると思われます。こんな地味で硬い文章のブログに、再三お越しいただいたことに、お礼を申し上げたところです。

その来訪者は、検索ワード「医療制度改革」「新高齢者医療制度」「高齢者医療確保法」、「混合診療」など興味ある語句で、また、調べたい言葉で検索をかけ、訪問していただいているようです。

アクセス解析で、その検索ワードをみると、結構鋭い感覚の人が多くことに気がつきます。一例ですが、「医療給付費」という検索が、ある時期に集中しました。それは、厚生労働省やマスメディアの表現が、「医療費の抑制」から、「医療給付費の抑制」に変化したからです。

また、ブログを通じての交流で、問題意識を共有できる仲間も、おおぜい出来てきています。

私のも結構硬いとは思っていましたが、もっともつと硬派のブログもあり、難しいことを軟らかく表現しているものもあり、多彩な情報を紹介している方もあり、地域的にも北海道から沖縄まで、さらに、海外から発信しているものもあり、そうしたブログ仲間と連携を取りながら、引き続き発信を続けていきたいと考えています。

仲間の皆さんも、ぜひ機会を作って、覗いてみてください。
アドレスは、<http://blog.goo.ne.jp/harayosi-2/> です。(原 義弘・神戸市)

◇ 編集部 だより ◇

▽三〇年、同志・先輩・友人から本当に心暖まる原稿をいただきました。今回は第一弾です。

▽「社会主義共同体」崩壊から十数年。世界情勢が荒々しさをましてきました。北朝鮮の核実験については、世界情勢全般とのかかわりで考えることが不可欠です。次号からじっくり考えていきたい。

いつのまにか座右に・・

二〇〇六年一月一日に「社会通信」が三〇歳・・そして来年の五月は一〇〇〇号との事・・さて、私はいつから「社会通信」と付き合い始めたのか・・

いまから一五・六年前に、職場の集約合理化がありました。組合員の「集約合理化反対！」の声も「組合」に無視され、やむなく片道二時間弱の電車通勤を強いられるようになりましたが、その通勤沿線で会員制の「学習会」が開かれている事を前から耳にしていました。その学習会には顔なじみの方も参加していましたので、どんな学習会なのか興味がありました。

しかし、当時は子供も小さかったので、共働きの妻の日程と家庭の都合との両方をにらみ合わせ、時間の許す時は途中下車をして「学習会」に参加をするようになりました。(この学習会は現在もつづいています)

しばらくの間「学習会」は古典を中心に学んでいましたが、その古典のテキストがまもなく終わるといふとき、誰からともなく「次は古典学習を一休みして、情勢をキチンと把握していけるような学習はどうだろう・・」という声に添い、「社会通信」の読み合わせと読後の感想交流を行うようになりました。

私には難しい古典はなかなか頭に入りませんでした。「社会通信」の読みあわせから得られる情勢を学ぶことは新鮮で、誌面に掲載されている職場の報告に合わせた身近な話題と討論が中心の「学習会」はとても楽しかったことを思い出します。

そのころには、もう「旬刊・社会通信」という誌名になっていましたが「進路」時代の記憶も甦りました。

私も働き続けて三十数年経ちますが、「社会通信」の継続三〇年がどのような力を持っているのかということについて、読者諸兄に対して改めて言うまでもないと思いません。

今、私が参加している峡東地域で行われている「講座・講演会」も三〇年以上続いていますが、最近講師を担当していただける方が少なくなりました。そんな中で無理を承知でお願いしている「社会通信・主宰者」の協力がなければ、「講座・講演会」の継続した取り組みも困難だったと思います。

三〇年という歲月の中で、誌面に登場した先輩諸氏の中には自らの進路を変えた方もおるようですが、一貫して労働者や弱者の目線で社会を切り開くマスコミが少なくなくなってきて途中で、「社会通信」の役割と継続には勇気付けられます。

また、全国で闘う仲間のタイムリーな報告や投稿、複雑な社会情勢の中で自らの耳目を開く新鮮なものを見方を得ることの出来る誌面は貴重な財産になっています。

堅苦しく難しい情勢認識の一致を求めるより、自らに近い立場で話し合いの出来る素材を提供する「社会通信」に、これまで以上の役割を求めたいと思います。

これからも一つでも多く号を重ね、資本と社会矛盾に対決する「社会通信」であることに期待をするとともに、峡東地域で継続している「講座・講演会」「学習会」の担

い手を中心に始まった「地域学習会」の参加者にも、「社会通信」が座右の冊子となるような「学習と交流」を作り上げて行きたいと思えます。

これからも「社会通信」のますますの発展を期待します。（上原和夫・山梨市）

未来ある子どもたちと『社会通信』の三十年

心療内科のお医者さんに『やられたらやり返せ』と教えたほうが良いのですか？』とたずねました。「ううん」と首を横に振り、「やり返したら相手はナイフを、やり返したら相手は拳銃を、やり返したら・・・」。

「ペンは剣より強し」、書くことです。だから書き続けます。子どもたちの苦しみを風化させてはいけない、子どもの心をこわす教師はいらない、そう思うから。着飾って笑いながら、旧担任・小林智子教諭が遅刻・早退を繰り返す姿を何度も路上で見かけるたびに、あのときの方がよみがえり、頭痛がして夜寝られません。

暴力を受け、泣いている子どもを無視し、他の女の子が心配して泣いていると訴えても無視し、暴力をふるった子どもへ注意もせず、「みんなのいる教室に行きたい。でも、こわがって一步も教室に入れない」と話すと、「Sのいる教室にいつでもどうぞ。Sには授業を受ける権利がある」と最初に暴力を受け傷ついた子どもの権利ではなく、暴力をふるった子どもの権利を主張した教師。

今まで疑うことをせず全面的に信賴し、子どもたちをまかせてきた教師の醜い、汚い実態を見ました。心療内科で「Sとの同席はしてはいけない」という診断書もらい、見せると、校長と養護教員で心療内科に行き、「保健室登校するように」と昔の同僚のよしみでその医者に言わせました。

何もしていない、教室に行きたいという子どもを排除し、何もなかったようにしたので。子どもが教室に戻りたい、戻るといのは回復の一段階で、他の子どもたちとのかかわりが、回復には不可欠でした。

他の何もしていない子どもたちをまきこまないでほしいという私たちの言葉を無視し、学校の授業方針の一環で少人数授業をすると始めたにもかかわらず、保護者懇談会において小林教諭、ウダ教頭は、「Rのせいでみんなにしんどい思いをさせているが、もうしばらくがまんしてください」と言い切りました。

他の保護者から私たちへの誹謗中傷が飛び交い、それまで毎日Rの回復につきそい夜も眠れぬ毎日、限界だった私の心は壊れました。そのとき、滝野さんご夫妻が何度も滋賀県までもお越しいただき、つらいときに応援してもらい「うんうん」と聞いてもらえる事は、とても救われました。支えになりました。

それから転校して二年七ヶ月、毎日の送迎が大変でしたが、里山の農村部の家族的な小学校で、Rの心身は癒されました。頭痛薬を多用していたので、ビタミン剤に替え、マッサージにも連れて行きました。学校の行事、何もかも出来なくなっていました。プール、遠足、泊り。出来なくなった事は一つずつ、休みの日に父親と三人で出

かけました。プールも。行けなかった遠足の場所へも。学校を休んだ日は、私と食事をしに行ったり、科学館へ行ったり、とにかく外に出るように心がけました。カラオケにもよくいきましました。

そんな時、上の子が二十歳になり「ありがとう。今まで育ててくれてありがとう」とメールが入り、跳び上がるほどうれしかったです。その前にはその下の子が高校に入り突然学校やめると言い出しました。軽音楽部の入部テストで落とされ続けたと。一緒に何箇所も個人レッスン場を見学し、習いに行き、入部して県大会で優勝でき、そのことが大学入試でも助かったようです。

Rは旧友とも一緒に家の前の市立中学校に進学して（加害児童Sは京都の私学に）バレーボール部に入り、毎日練習に精出す毎日。二年生に上がる直前、クラスメートが自殺しました。

中一で転校してきたクラス通信によく名前なのる、めんどうみのよい、聡明な女の子でした。仰木の里小学校の間違った対応を見てきて、いつか必ずこんな日が来ると思っていました。子どもたちは、暴力、いじめを間違っているときちんと指導されていません。教師たちは言ったと言うでしょう。暴力をふるった子どもを堂々と登校させ、被害者を転校においやった教師たちを子どもたちは見えています。感じています。中学校で起こった事だけど、私は明らかに大津市立仰木の里小学校（以下「里小」）教師の責任が大きかったと思っています。

亡くなった子の前の小学校の同級生はお葬式の最初から最後まで、出棺した後もその場を動けず号泣していました。私は言葉がありませんでした。たった十二歳で、いつかこんな事があるとわかっていたのに、助けてあげられなかったのです。もしかしたら、私とRがこうなっていたかもしれない。

今日もテレビで、いじめで自殺した北海道の小学生の遺書を、市教委は読みながらごまかそうとしています。みにくいと思います。情けないと思います。「間違ったらあやまる」「いじめ、暴力はいけない」、子どもたちに言っていることをあなたがまずやらなければ、子どもたちには通じません。他人を思いやる、自分を大切にできる人に、未来ある子どもたちを大切に育んでいきたいのです。

そんな思いと一緒にできる『社会通信』の三十年、おめでとうございます。心から感謝致します。
（稲村ひづる・大津市）

『社会通信』で元気を取り戻したわが子

わが家の四男Rのいじめ傷害事件（当時小学三年、現在中学二年）、それによる不登校、心の傷の回復の問題では、たいへんなご心配をおかけし、お世話になりました。この七月一〇日で、あのいまわしい「鉛筆刺し事件」（Sという大柄の子が背後からRの肩に鉛筆の芯が食い込むまで何度も刺した。）から丸五年の歳月が流れました。Rの母親はこう語ります。

「小三から長かったです。里小の旧担任・小林智子教諭、深田雅樹校長、市教委・木田昭一郎前教育長の居直り、私たちへの誹謗中傷、懇談会の風聞による近所のいやがらせ。どこか遠くに引越したいとも思いましたが、家が売れない。『みんなが友達や』というRの気持ちを無視できない。先日からクラブのお友達の家へ遊びに行くようになりました。『今から帰る』の電話の後から、みんなの大きな笑い声が聞こえ、やっとな暴力を受けた前日のRに戻ってきたのかなと、油断は出来ないけれど。Rや私の心の病は他人にはわからない。やっとな口に出して説明しても、父親でさえ『いつまでもそんな事を言うな、甘えるな』と、くやしい悲しい思いを何度も何度もしました」と。友人宅訪問は一時できていたのに、昨春の里小時代の同級生によるわが家への集団窃盗事件以来、一度もできなくなり誰も来ずという状態でしたが、きのうRが自分の自転車でかなり離れた友人宅に遊びに行ったのです。

被害者・被災者の救済を第一義に考え対処すべきだ、というしごく当然のことがなぜか校門をくぐると通用しなくなるのですが、また「そんな個人的なことを」という声にもかかわらず、困難をいとわず原稿を掲載し続けていただいた発行人の滝野さんと、暖かく見守り続けてきて下さった読者のみなさんのおかげです。ありがとうございます。いました。

『社会通信』のますますの発展を心よりお祈り申し上げます。(稲村 守・大津市)

◇ 読者からのおたより ◇

駅に契約社員導入？ JR東日本は不安定雇用の契約社員導入を考えています。駅社員の二割の導入です。二割で二千四百名です。駅の一括業務依託を考えています。JR東日本は公共交通であり、正社員を多く採用して社会的に貢献すべきです。(埼玉・H)

編集部より 企業はでかくなればなるほどケチになります。十人の百円は千円ではかりませんが、五万人では五百万円にもなりますもの。

一千号 まもなく一千号ですね。バックナンバー私のところすべてあります。どなたか有効に使ってくれる方はいませんか。(東京・三木信之介)

編集部より 十一月一日号で三十周年、来年五月二一日号で一千号です。原稿等寄せて頂ければ嬉しい。どなたか三木さんの要望に伝えていただく方いらっしゃいませんか。編集部にご連絡を。改憲阻止 政府・自民党は「解」憲を予定しています。私どもは運動の正念場とし、阻止のためがんばります。(兵庫・I)

編集部より 兵庫の仲間の学習、活動、改憲阻止、戦線構築への全力つくした取り組みには驚きを通りこえ感心させられています。兵庫のような取り組みが全国でおこなえる組織力をもつことが私たちの課題。

二五周年コンサート 不当に首を切った理不尽企業の門前に毎日立ち、ギターを手に誇り高く訴え続けて四半世紀の中年男性、田中哲朗氏がいる。氏の不屈の闘いは一段と輝きを増し、「長いものに巻かれない」で「人間らしく生きよう」のメッセージは、今や全世界へ届き始めた。イギリス、ドイツ、オーストラリア等のメディア報道がその証である。闘い続ける田中哲朗氏の「ギターと語り」に耳を傾けよう。そこで自らを高め、明日へのエネルギーを蓄えよう。この秋が、現実を変え未来を生きる新たな一歩への契機になることを切に希む。皆さんのご来場をお待ち致します。

編集部より 十月二七日(金)一八時三〇分。八王子市クリエイトホール。協力は千円です。